Osaka Shoin Women's University Repository

田上集注釈(四)

西木忠一

凡例

一、本稿は『私家集大成2』中古Ⅱ、『田上集』(島原松平文庫蔵)の注釈を試みたものである。

一、右底本の誤りと認められるところは他の歌集により改め、㊟にその旨を記した。

一、各歌の頭に底本の歌番号を記した。

一、本注釈は、通釈・語釈(必要に応じ)・付の三項目を立てて記した。

一、参考のために、付の項に『散本奇歌集』(『私家集大成2』中古Ⅱ、書陵部蔵)、『夫木抄』『万代集』(『新編国歌大観』)などを、それぞれ歌番号とともに記した。

一、本注釈において、「顕昭」は『散木集注』(群書類従巻第二九〇)に、「村上忠順」は『散木奇歌集標註』(愛知県刈谷市立中央図書館蔵・『散木奇歌集』)に、「玉井幸助」は『校註国歌大系第十三、5中古諸家集』に、「今井優」は「源俊頼歌集 田上集の里」(田上郷土史料館報4、昭和五十四年十一月)に、「森本茂」は『校註歌枕大観近江篇』にそれぞれよった。

㊟①『散木奇歌集標註』は、同書の「散木奇歌集標註序」から用いた書名である。

②本注釈をなすに当り、愛知県刈谷市立中央図書館に格別の助力を賜わった。記して謝意を表するものである。

百首歌にあしろ

あしろにてひをのおほくよるをみてよめる

Osaka Shoin Women's University Repository

五〇　網代木のいかちもすまによるひをは　かきやるかたもなきみなりけり

通釈　百首歌に網代（を題にして）

網代に氷魚が多く寄り集まっているのを見て詠んだ（歌）

網代木のいかちにもいっぱい寄り集まっている氷魚を、掻き集める方法もない、真にやる方もないわが身であることだ。

語釈　○いかち　「いかちもすまとは。いかによめるにかおぼつかなし」（『散木集注』）。ただし、魚を獲る仕掛けであろうとは容易に想像できよう。なお、今井優氏は「『い』は接頭語。『かち』は『かちとる』などという語と同じ」で、「網代の杭の立ちならんだ最奥部に、はね上ってきた魚をとらえる簀の子」の仕掛けであろう（五十頁）とされる。　○すまに　副詞で、すきまなしにの意。「簀間（すま）に」を掛ける。「山ふきのみぎはもすまに吹きぬればあらふさなみもいとなかりけり」（『散木奇歌集』巻第一、春部、三月）

付　①散木奇歌集（巻第四　冬部　十月）

あしろにて、ひをのおほくよるをみてよめる

六五　あしろきのいかちもすまによるひをはかきやるかたもなき身也けり

②顕昭

いかちもすまとは。いかによめるにか。おぼつかなし。すまにといふことは。ひまなき心とみえたり。てもすまなどよめるは。てにひまなくとよめるなり。このうたも若いかでもすまにとよめるか。網代の手といふことあり。かみひろにうちならべたるくひなり。いかとは。をのれがといふなり。てとちと同五音故なり。又てとよめるを。ちとかきたがへたるにもやあらん。すゑにかきやるかたなしなどいへるも。あじろの手に。わがてをよせたりとおぼえぬべし。

五一　宮この人まうて来て、落葉浮浪といへることをよめる

みとせまて人にすさめぬにしきゝと　みれはあしろのこのはなりけり

通釈　都の人がやって来て、落葉浮浪（落葉が浪に浮かぶ）ということを詠んだ（歌）

三年まで人に相手にされない錦木だと思っていると、それは網代に浮かんだ木の葉だったよ。

語釈　○すさめぬ　「すさむ」は気のむくままに事をすすめること。「山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見はやさむ」（『古今集』巻第一春上、よみ人知らず）。「頭中将のすさめぬ四の君などこそ、よしと聞きしか」（『源氏物語』花の宴）。　○にし

Osaka Shoin Women's University Repository

きゝ　陸奥の国において、男性が女性に思いを寄せると、その女性の家の前に立てたという、五色に彩色した木で、長さ約三十㎝。女性が家の内にとり入れたならば承諾。取り入れない場合は男性は一日一束ずつ千束になるまで立てて、誠意を示すという風習があった。「おもひかねけふたてそむるにしきぎのちつかもまたであふよしもがな」（『詞花集』巻第七恋上、大蔵卿匡房）。「にしきぎはたてながらこそくちにけれけふのほそぬのむねあはじとや」（『後拾遺集』巻第十一恋一、能因法師）

付　①散木奇歌集（巻第四　冬部　十月）

都の人まうてきて、落葉浮浪といへる事をよめる

みとせまて人もすさめぬにしき木を　みれはあしろのこのは也けり

②『俊頼髄脳』

錦木はちづかになりぬいまこそは人にしられぬねやのうち見めあらてくむやどにたてたる錦木はとらずはとらずわれやくるしき

錦木とは、みちのくにに、男、女をよばはむと思ふとき、消息をやらで、たき木をこりて、目どとに一束、その女の家のかどのほどに立つるを、遇はむと思ふ男の立つる木をば、程なくとり入れつれば、その後は、木をば立てで、ひとへにいひよりて、親しくなりぬ。遇はじと思ふ男の立つる木をば、いかにもとり入れねば、千束をかぎりにして、三年立つるなり。それなほ、とり入れねば、おもひ絶えてのきぬ。この木を、錦木といへることは狛鉾の棹のやうに、まだらに彩りて立つれば、いふなり。とくしりたりと、おぼしき人は申せど、まことには、さもせぬにや。

故帥殿、田上におはしましたりしに、くしまうされたる人〳〵歌よまれけるに、月照網代といへることをよめる

あしろには月の光もあるものを　なにますらおのかゝりたくらん

㊟　底本詞書「……月照網代とみること」とある。誤写とみて『散木奇歌集』により改める

通釈　故帥殿が田上においでになった時、お連れ申された人々が歌を詠まれた折に、月照網代ということを詠んだ（歌）

網代には月の光もさしているのに、どうして男達は篝火を焚いているのであろうか。

語釈　○故帥殿　俊頼の父「源経信」。一〇一六～一〇九七。平安朝の廷臣、琵琶の桂流の祖。歌人。民部卿道方の六男。母播磨守源国盛の女。○かゝり　篝火。

Osaka Shoin Women's University Repository

付 ①散木奇歌集（巻第四　冬部　十月）

故帥殿、田上にをはしましたりしに、くしまうされたる人〳〵、歌よまれけるに、月照網代といへることをよめる

六〇四　あしろには月のひかりもある物を　なにますらをのかゝりたくらん

②夫木抄（巻第十六　冬部）

月明網代といふ事を　　俊頼朝臣

六七〇五　あじろには月の光もあるものをなにますらをのかがりたくらん

落葉満網代

三三　み山には嵐ふくらし網代木に　かきあへぬまて紅葉つもれり

通釈 落葉が網代に一杯になる（のを詠んだ歌）

山には嵐が吹き荒れているらしい。網代木には掻き払いきれないほどに紅葉が積もっていることだ。

語釈 ○網代木　網代を支えるために水中に打った杭。「あさぼらけうぢの河霧たえだえにあらはれわたる せぜの網代木」（『千載集』巻第六冬、中納言定頼）。「ひをのよるかはせにたてるあじろぎはたつしらなみのうつにやあるらん」（『金葉集』巻第四冬、皇后宮肥後）

付 ①散木奇歌集（巻第四　冬部　十月）

落葉満網代

六〇八　み山には嵐ふくらしあしろきに　かきあへぬまて紅葉つもれり

②万代集（巻第六　冬歌）

落葉満網代といふことを　　俊頼朝臣

三三六　みやまにはあらしふくらしあじろぎにかきあへぬまでもみぢつもれり

③関根慶子氏は「名残りの網代木にただ紅葉が一ぱい吹きよせられて引っかかっているさまを、写生的にあっさり描きながら、情景が写されていよう」（『平安文学 人と作品 ところどころ』一二三頁）と述べられた。作者の眼前の風景は主に下句の「かきあへぬまで紅葉つもれり」である。そのことから上句「み山には嵐ふくらし」が想像されている。川上で吹き散らされ流された紅葉が網代木に積もる情景は、色彩感豊かな景を読者に感じさせるに違いなかろう。そうした中に作者の身に迫る冬の寒さが、じりじりと感じられる歌である。

Osaka Shoin Women's University Repository

十一月
山さとすみさひしくて、とふ人もなきにつけても、たれとな
くうらめしさによめる
五四　みやこには忘られにけるみなれとも　さむさはかりはたつねき
にけり

通釈　十一月山里での生活がさびしくて、訪ねる人もないにつけても、
誰ともなく恨めしさに詠んだ（歌）
都ではすっかり忘れられてしまって、誰一人訪れる者もないわ
が身ではあるが、寒さだけはこの山里にまで訪ねて来たことだ。

付　①散木奇歌集（巻第四　冬部　十月）
山里すみさひしくて、とふ人もなきにつけてもたれともな
くうらめしきによめる
六〇九　都にはわすられにける身なれとも　さむきはかりはたつねき
にけり

田上に侍けるに、かりそめのすみかとはいひながら、あやし
きにつけておほえける
五五　あしひたくやまのすみかは世中を　あくかれそむるかとてなり
けり

通釈　田上に居た時に、一時的な住居とはいうものの、疑わしく
（長く住みそうに）思われて浮かんだ（歌）
葦火を焚く山家暮しは俗世を出はじめる門出であることだ。

語釈　○あしひ　干した葦を焚く火。「難波人葦火たく屋のすして
あれどおのが妻こそとこめづらしき」（『万葉集』巻十一、作者未
詳）。

付　①散木奇歌集（巻第四　冬部　十一月）
田上に侍りけるに、かりそめのすみかとはいひなから、あ
やしきにつけておほえける
六二四　あし火たくまやのすみかは世の中を　あくかれそむるかとて
也けり

②詞花集（巻第十　雑下）
みやこにすみわひてあふみにたなかみといふところにまか
りてよめる　源俊頼朝臣
二二八　あしひたくまやのすみかはよのなかをあくがれいづるかとで
なりけり

③「粗末な家での生活も、煩わしい人間関係から逃がれ、風流韻
事を営む唯一の縁であればどんなにか楽しいものであったであ

Osaka Shoin Women's University Repository

ろう。その気持ちが下句に反映されている。初句からさらりと詠んだ平明な歌であるが、質素な山里生活に甘んじた作者の温雅な人柄が窺えよう」（菅根順之『詞花和歌集全釈』四六四頁）。

田上の山里にて、ふしたる所に雪のもりきたるをみてよめる

五六　柴の庵のねやのあれまにもる雪は　わかかりそめのうはき也けり

通釈　田上の山里にて、臥している所に雪が洩れてきたのを見て詠んだ（歌）

柴の庵の寝床の荒れたすき間から洩れて来る雪は、私のほんの一時的な上着であることだ。

付　①散木奇歌集（巻第四　冬部　十二月）

田上の山里にて、ふしたる所に雪のもりきたるをみてよめる

六六二　柴の庵のねやのあれまにもる雪は　わかかりそめのうはきなりけり

②臥している所に雪が入り込んで降りかかる。それを「わがかりそめのうはぎ」としゃれて詠んだ歌である。なお、「かりそめ」は「仮初」と「染」を掛けている。

田上に侍けるころ、八月はかりに風のけしきなと、つねよりも身にしみてよめる

五七　草のはに風をとつれてよとゝもに　涙すゝむる秋のそらかな

通釈　田上に住んでいたころ、八月ごろに風の吹く様子などが、常よりも身にしみて感じられる時に詠んだ（歌）

草の葉に風が吹き訪れて、夜が来るとともにますます涙が流れる秋の空だなあ。

語釈　○よとゝもに　「よ」は「世」・「夜」が考えられるが、ここは「夜」（『散木奇歌集』）が相応しい。

付　①散木奇歌集（巻第三　秋部　八月）

八月はかりに、くれかゝりける程に、風のけしきなともあはれにおほえけれはよめる

四七四　草の葉に風をとつれて夜とゝもに　涙すゝむる秋の空かな

田上に侍ける比、かみの里と言ひける所に、ゆわかして人のむかへけれは、まかりけるに、とりゐの有けるまへに、みちしるへのものゝ、おそろしけれは、いかなる神のおはします

Osaka Shoin Women's University Repository

そ、と尋ければ、もちゐの宮と申神のおはします、といふをきゝて、俊重かたはふれて申ける

五八　あれこそはもちゐのみやと聞からに　つく〳〵思ふことをこそいのれ

通釈　田上に居た頃、かみの里と言った所に、湯を沸かして迎える人がいたので、行ったところ、鳥居が立っている前に、道しるべがあったが、それが恐しかったので、どういう神様のおいでになる神社ですかと尋ねたところ、もちゐの宮と申し上げる神様がおいでになります、というのを聞いて、俊重が冗談まじりに申した（歌）

あれこそがもちゐの宮とわずかに聞いただけで、願うことを心して祈るのである。

語釈　○ゆわかして　「風呂をたてること」（今井優、三六頁）。○もちゐの宮　毛知比の宮と餅居の宮とを掛ける。「餅」と「つく〳〵」は縁語。　○聞くからに　「からに」は原因・理由を表わす名詞「から」に、「に」（格助詞）が接続したもので、その原因・理由がきわめて軽いのに、その結果が逆に重いことを示す。

付　①散木奇歌集（巻第六　悲歎部　神祇）

（一葉分、八首脱）

はしますそと尋ければ、もちゐの宮と申神のおはしますと云を聞て、俊重かたはふれて申ける

六九　あれこそはもちゐの宮ときくからに　つく〳〵と思ふ事をこそいのれ

②〔餅津大明神〕里村に有り。正一位餅津宮と号す。祭礼毎歳三月亥の日祭神不詳。相伝往古は大社にて、五十四村の神事にて、御旅所を神立大明神と号し、三月亥の日神事七日の間を御旅といふ。所謂五十四村は田上郷十八村、大石五箇村、青地十五村、田原郷十八村なり、今は纔に里村ばかりとなれり。今里村の田の字に神殿（しんでん）の森、市殿の森、里辻（さとつじ）、花畑、舞台、榊本、幣本、連歌田、和歌田、琵琶田といふ有り。是等皆右大社の旧蹟なるべし。（『近江輿地志略』）

なお、同書欄外注記に「毛知比神社、祭神日本武尊、保食神、天平宝字二年創立、境内古墳あり。懸仏（鎌倉時代）」とある。

③神社の名称については、もちゐの宮（平安末）茂智津大明神（天正十八年）餅津大明神（延宝四年）毛知比宮（寛永）毛知比大明神（慶安より安政年間）茂智頭大明神（安政二年）の記録あり、もちの宮は保食神の宮の転訛したものらしい。（『滋賀県神社誌』・編纂滋賀県神社誌編纂委員会）

といふをきゝて和し侍ける

Osaka Shoin Women's University Repository

二九　あれとみはさしてそれともまいらまし　よそにもちゐのみやつかへしつ

と申てすきにけるとそ

通釈　というのを聞いて和した（歌）

あの宮が毛知比の宮と見たならば、志してよくよく参りましょう。他所に用いられて宮仕えをしている身分の自分は。

と申して過ぎ去ったとかいうことである。

語釈　○よそにもちゐ　「他所に用ゐ」と「毛知比（宮）」を掛ける。なお、俊頼は他の役目（「宮廷に収める氷魚の徴収の任をもって田上に来ていたのではないか」今井優、三八頁）で田上へ来ていることが、「よそにもちゐのみやつかへしつ」で判明する。

付　①散木奇歌集（巻第六　悲歎部　神祇）

といふを聞て和し侍ける

二〇　あれを見はさしてそたれもまいらまし　よそにもちゐのみやつかへしつ

と申てすきにけるとそ

田上に侍ける比、つはきをきりをきて、はひにやかむとてからすを、みてよめる

二〇　我身とも椿の枝のみゆるかな　はひになるへきほとのちかさに

㊟　底本詞書「つはさをきりをきて」とあるが、誤写とみて『散木奇歌集』により改める。

通釈　田上にいた頃、椿を切っておいて、灰に焼こうとして枯らせているのを見て、詠んだ（歌）

切り取られた椿の枝がわが身とも思われることだ。死んだ灰になる時が近いゆえに。

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

田上に侍ける比、つはきをきりをきて、はひにやかんとてからすをみてよめる

二六　わか身ともつはきのえたのみゆる哉　はひになるべきほとのちかさに

②池田富蔵氏は「椿を切って灰に焼くという静かな田園の生活の中にあっても、それをわが身の運命として把握して詠みこむのである。六十才頃の俊頼の境涯の典型であろう。こうした思いの中に田上に三年ほどいたようである」（『源俊頼の研究』五九頁）とされたが、「……田上に三年ほどいたようである」は一概に従えない。再考の余地があろう。

③「灰になるは火葬の事をいふ也」（村上忠順）とする説あり。

Osaka Shoin Women's University Repository

当然従うべきである。

田上にてつれ〳〵なりけるに、河のをとつねよりもをとつれてともゝなきこゝちしてよめる

六一　河の瀬におちまふ水のゆく〳〵と　思ふ心を人にいはゝや

通釈　田上において所在ないままにいると、河の音が常よりも近く聞えて来て、ひたすら友もない心地がして詠んだ（歌）

河の瀬に落ち舞う水のように、意のまゝにわが胸の思いを人に伝えたいものだ。

語釈　○河の瀬におちまふ水　河の水が岩などに当って白いしぶきを上げる状態をいう。なお、第三句「ゆく〳〵と」の序詞

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

田上にてつれ〳〵なりけるに、かはのおとつねよりもをとつれてともしなきこゝちしてよめる

三六　川のせにおちまふ水のゆく〳〵と　おもふこゝろを人にいはゝや

田上にてものいひけるつゐでに、松たけの有けるを、おそくやく、なといひけるをきゝてよめる

六二　ほともなくとりいたせとや思ふへき　松と竹とは久しきものを

通釈　田上で（ある人と）世間話をしたついでに、松たけがあったのを（焼いて出そうとすると）おそく焼くことだ、などというのを聞いて詠んだ（歌）

すぐに取り出せと思ってよいものであろうか、松と竹とは元来長く久しいものだというのに。

語釈　○松と竹とは……　玉井幸助氏は「松と竹とは長寿のものであるのに」と注記する。

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

田上にて、ものいひけるついてに、まつたけのありけるをおそくやくなといひけるを聞てよめる

一三〇四　ほともなくとりいたせとや思ふへき　松と竹とはひさしきものを

②「松たけ（茸）」を「松」と「竹」に二分して詠んだ歌で、滑稽味のある歌となっている。

田上に侍ける比、山のかひに人のあまたにものひく音のしけ

Osaka Shoin Women's University Repository

るを、とはすれは、山よりふねつくりてくたすなり、といふ
をきゝてよめる

六三　山ひこはこのもかのもにこたへつゝ音たかさこの舟つくる也

通釈　田上にいた頃、山の谷間で大勢の人々が物を引く音がしたので、問はせたところ、山から舟を作って下すのだ、というのを聞いて詠んだ（歌）

山彦はあっちこっちに反響しながら、音高く美しい浜辺へ舟を着けるのである。

語釈　○山のかひ　山と山の峡（かい）で谷間のこと。○このもかのも　こっちあっち。「も」は「おも（面）」の変化したもの。「芦屋のうなひ処女の　八年児の……　このもかのもに　つくり置ける　ゆえよし聞きて　知らねども……」（『万葉集』巻九、一八〇九）。○音たかさこ　「たかさご」は砂の美しい浜をいい、「音たか」しを掛ける。

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

田上にはへりける比、山のかひに、人のあまた物ひくをとのしけるを、とはすれは、山よりふねつくりてくたすなり、といふをきゝてよめる

一三九　山ひこはこのもかのもにこたへつゝ　をとたかさこにふねくたす也

②「高砂は地名にあらすすへて山をいへり」として「播磨国の名所」と村上忠順は注記する。

田上にて、八月許につれ〳〵なりけれは、なにとなくあゆみいてゝ、さくらたにのかたへまかりけるに、みちのとをかりけれは、やすむとて、式部大輔よみける

六四　春ならて桜たにゝはみにゆかし　あきともあきぬ道のとをさに

通釈　田上にて、八月ごろに所在ないままに、何となく散策に出かけて、桜谷の方へ行ったところ、道が遠かったので、休もうとして、式部大輔が詠んだ（歌）

春でなければ桜谷まで景色を見に行くまい。あまりの道のりがあきあきするほどの遠さゆえに。

語釈　○さくらたに　佐久奈（さくなど）止神社の辺をいう。「にほてるや桜谷より落ちたぎつ波も花咲く宇治の網代木」（『夫木抄』慈鎮）。○式部大輔　俊頼の子「俊重」。

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

田上にて、八月許につれ〳〵なりけれは、なにとなくあゆみいてゝ、さくらたにの方へまかりけるに、みちのとをか

Osaka Shoin Women's University Repository

りけれは、やすむとて、式部の大夫のよめる

一三七　春ならてさくらたにをは見にゆかし　あきともあきぬ道のとをさに

②『蜻蛉日記』（中）に「をのこどもの中には、『これよりいと近かなり、いさ佐久那谷見には』、『いまも口ひきすごすと聞くぞ、からかなるや』などいふを聞くに、さて心にもあらず引かれいなばやと思ふ」（天禄元年七月の条）とある。『近江輿地志略』には「此地即佐久奈谷なり。大七瀬の一なる事は〔公事根源〕に見ゆ」とも見える。この辺なかなかの急流である。

③玉井幸助氏は「あきともあきぬ」に対して「上の春に対して秋をかく」と注記して、その対応を指摘する。従うべきである。

といふをきゝて和し侍ける

一三八　桜たにまことに匂ふ比ならは　道のあきとはおもはさらまし

通釈　というのを聞いて和した（歌）

桜谷の桜さえ本当に咲きにおう頃であるならば、道を辿るのがいやになるなどとは、決して思わないであろう。

語釈　○桜たに　地名「桜谷」に「桜だに」（副助詞「だに」）を掛ける。　○道のあき　道程に飽きる意と、季節の秋とを掛ける。

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

といふを聞て和し侍ける

一三九　さくら谷まことに匂ふころならは　みちをあきとは思はさらまし

水車の、程過てたてたれはめくらぬを、見てよめる

一四〇　捨られてうき世にたてる水車　よにめくるともみえぬ身なれや

通釈　水車が、使われなくてそのまま時期を過ぎて立っているので（今更）まわらないのを、見て詠んだ（歌）

捨てられてうき世に立っている水車ではないが、華やかな世にめぐり出るとは思えないわが身であることだ。

語釈　○うき世　憂き世で、つらい世の中の意。「捨られてうき世にたてる水車」は「めくる」の序。

付　①の散木奇歌集（巻第九　雑部上）

水くるまの、ほとすきてすてたれは、めくらぬを見てよめる

Osaka Shoin Women's University Repository

一三九　すてられてうき世にたてる水車　よにめくるとも見えぬ身なれや

つかなみといふ物のうへに、よ比ねて、たひかさなるまゝに、あやしけになりけるをみて、俊重かよめる

六〇　つかなみのうへによる〳〵旅ねして　くろつの里になれにけるなか

通釈　つかなみという物の上に、数夜寝て、旅寝が重なるにつれて、見苦しくなった姿を見て、俊重が詠んだ（歌）

つかなみの上に夜ごと旅寝をして、黒津の里に馴れて、その名のごとく黒くなってしまわれたことです。

語釈　○つかなみ　頭昭は「わらにて畳のひろさにくみて。山家に敷物也。わらぐみともいひ。ねこかきあらしきなどもいふ也」と注記する。なお、『俚言集覧』には「ツカナミとて稿を編て敷也ワラクミ、アウシキ、ネコカキともいふ」と見えることを参考までに付記する。

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

つかなみといふものゝうへに　よころねて、たひかさなるまゝに、あやしけになりけるをみて俊重がよめる

一三〇　つかなみのうへによる〳〵旅ねして　くろつのさとになれにけるかな

②夫木抄（巻第三十一　雑部十三）

くろ津の里　黒津　近江　　源　俊重

家集

一四六六　つか浪のうへによるよるたびねしてくろ津のさとになれにけるかな

③〔黒津村（くろづ）〕稲津村の南にあり。其称すること久し。黒津の庄もとなり。（『近江輿地志略』）

〔黒津荘〕稲津村・黒津村・太支村・関津村等といふ。古歌に「田上や黒津の庄の疲男網代もるとて色の黒さよ」といへり。（『近江輿地志略』）

④黒津の里と顔の黒いことを掛けて詠じた歌である。地名に他の意味を掛けて言葉の遊戯をしていて、『近江輿地志略』に引く古歌と同発想の歌である。俊重はこの古歌を念頭に六七番の歌を詠んだのではなかろうか。

とよめるをきゝて和し侍ける

六六　つかなみのうへはくろつになるれとも　したのねよさにしく物

Osaka Shoin Women's University Repository

そなき

通釈 と詠んだのを聞いて応じた（歌）

つかなみの上に寝て黒津の里に馴れたけれども、これを下に敷いた時の寝やすさは、他に及ぶものがないことだ。

語釈 ○なるれ 「なる」（ラ行下二）。 ○しく 「如く・及く」で、至り及ぶ意。なお、「敷く」を掛ける。なお、「つかなみのうへ」と「したのねよさ」に機知が見える。

付 ①散木奇歌集（巻第九 雑部上）

とよめるを聞て和しはへりける

一三二 つかなみのうへはくろつになるれとも したのねよさにしく物そなき

させる事なくは京へのほらしと思けれと、いつしかみやこのかた思いてられてよめる

充 身なからもならぬ心は程もなく いとふみやこのかたそ恋しき

通釈 特別これといった事情がなくて京へのぼるまいと思っていたが、いつしか都の方が恋しく思い出されて詠んだ（歌）

われながらも思う通りにいかないわが心は、嫌っていた都の方がそれ程の時も過ぎていないというのに、恋しく思われることだ。

語釈 ○思いてられて 思い出されて。「られ」は自発

付 ①散木奇歌集（巻第九 雑部上）

させる事なくは京へのほらしと思ひけれと、いつしか宮とのかた思いてられてよめる

一三三 身なからもならぬ心はほともなく いとふみやこのかたそこひしき

②自分では都へは決して帰るまいと思い続けている。だが、そう思うあとからすぐ都の方が恋しくなるという。人の心の皮肉である。

つれ〳〵にはなかめやる かたに、くわといふ木のたちなみて、よろつをしふれと、あるしの、おしけに思たれは、えきゝぬことをよめる

ヒロ なかめやるかたをもいかゝさえさらん はかなきとにくわはなれねは

通釈 退屈なままにずっと遠くまで眺めている方角に 桑という木

Osaka Shoin Women's University Repository

が立ち並んで、（見通しがきかないので、桑の木を伐るように）教えるけれど、主が桑の木を伐るのを惜しそうに思ったので私の教えをよう聞き入れないことを詠んだ（歌）

遠くまで眺めるのにどうして支障がないであろう。とりとめもないこと（桑の木を伐り惜しむこと）で桑の木を伐り捨てないので。

語釈 ○さえさらん　「さえ」は「障へ」で支障を来たすことをいう。玉井幸助氏は「ふさがぬのだろう」と注記する。　○くわは　なれぬは　「くわ」に「桑」と「苦は」を掛ける。

付 ①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

つれ〳〵にはなかめやるかたに、くわといふ木のたちなみて、よろつをさふれと、あるしのをしけにおもひたれは、えきらぬ事をよめる

一三三　なかめやるかたをもいかゝさへさらん　はかなきことにくはなれねは

②「極楽浄土を眺め思う邪魔になっているはずだ、ちょっとしたことにも苦は離れていないからという意味をもたせている。（中略）ちょっとしたことにも苦は離れられないので極楽へは行けないという主意である」（今井優、十五頁）とみえる。詠者の思想の片鱗が窺える歌であろう。

一三四　山にあそひありきけるに、しかのひしるこゑのしけれは　かせかけてひしるを鹿の声きけは　ねらふ我身そ遠さかりぬる

通釈 山を遊び歩いていた時に、鹿の叫び鳴く声がしたので（詠んだ歌）

調子を高く張りあげて大声で鳴く雄鹿の声を聞くと、鹿をさがし求めるわが身が、われ知らず退いてしまうことである。

語釈 ○ひしる　玉井幸助氏は「鹿のなくこと」と注記する。大声をあげる、叫ぶ意。　○かせかけて　次の「ひしる」を修飾するので、を鹿の「ひし」り方を詠じた句と思われる。調子を張りあげる意であろうか。再考の要あり。なお、「枷かけて」と解して、「鹿」を「ねらふ」自分に「枷」をかけて（ねらう気持ちを妨げて）とも考えられる。一応、前者で解しておいた。

付 ①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

山にあそひあるきけるに、しかのひしるこゑのしけれは

一三五　かせかけてひしるをしかのこゑきけは　ねらふわか身そ遠さかりぬる

Osaka Shoin Women's University Repository

田上に侍ける比、むかひの山きはに、おほきなるゐのしゝのみえけれを、小牛とこそみつれ、と人のいひけるをきゝてみめる

一三 鹿をみてむまといひける人たにも　ゐをはうしとは思はさりけん

通釈 田上に居たころ、むかいの山の麓に、大きな猪が見えたのを、ある人が小牛かと思ったといったのを聞いて詠んだ（歌）

鹿を見て馬といった人でさえも、よもや猪を牛だとは思わなかったことであろう。

付 ①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

田上に侍りけるころ、むかひの山きはにおほきなるゐのしゝの見えけるを、小牛をこそみつれ、と人のいひけるを聞てよめる

一三八 鹿をみてむまといひける人たにも　ゐをはうしとや思はさりけん

②「人」が「ゐのしゝ」を見て「小牛」といったので、作者が即座に『史記』の故事（秦の趙高が鹿を馬といった故事）を連想して詠じた歌である。

③八月己亥、趙高欲ㇾ爲乱。恐㆓群臣不ㇾ聽、乃先設ㇾ験。持ㇾ鹿献㆓于二世㆒、曰、馬也。二世笑曰、丞相誤邪。謂ㇾ鹿為ㇾ馬。問㆓左右㆒。左右或黙、或言ㇾ馬、以阿㆓順趙高㆒。或言ㇾ鹿(者)。高因陰中㆓諸言ㇾ鹿者㆒以ㇾ法。後群臣皆畏高。（『史記』一、本紀　秦始皇本紀）

川よりいかたのくたるか、くひのたてるをみてをしのけてくたるをみてよめる

一三九 いかたしにあそふま川のみをつくし　をしのけられてすくる比哉

通釈 川から筏が下ってくるのであるが、杭が立っているのを見て、それを上手に避けて下るのを見て詠んだ（歌）

筏師に出あう杣川のみおつくしのように、身を尽して生きても世間の隅に押しのけられて日を過ごすこの頃であることだ。

語釈 ○いかたし　筏に乗って川を下ることを生業とする人で、筏差しともいう。「浅き瀬になげきて渡る筏師はいくらのくれか流れ来ぬらん」（『宇津保物語』祭の使）。　○そま川　杣山から杣木を出して、流して運ぶ川。なお、「杣木」は材木になる木、その木を植えた山が「杣山」である。「そま川におろす筏のいかにともいふべきかたもなくぞなるかな」（『浜松中納言物語』巻二）。

Osaka Shoin Women's University Repository

○みをつくし　水路標識の「標澪」と「身を尽し」を掛ける。

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

川よりいかたのくたるか、くひのたてるをみて、をしのけてくたるをみてよめる

一三九　いかたしにあふそま川の身をつくし　おしのけられてすくるころかな

②夫木抄（巻第三十三　雑部十五）

雑歌中　同（俊頼朝臣）

一五七五　いかだしにあらそふ川のみをつくしおしのけられてすぐる比かな

松のすひつにすることともなくてかなはといふ物のたてるをみてよめる

一五四　いかにせんいつちゆけとも世中の　かなはぬさまそにる物もなき

通釈　松の灰櫃に寄って居て、特にすることもなく金輪というものが立っているのを見て詠んだ（歌）

いかにしたものであろう。どこへ行こうとも世の中が自分の思い通りにならないさまは、全く他に似る物がない有様である。

語釈　○すひつ　炉。いろり。「火桶の火、灰櫃などに、手のうらうち返しうち返し、おしのべなどして」（『枕草子』）。　○かなは　「金輪、鉄輪」。五徳（火鉢や囲炉裏に置いて、鍋ややかんを載せる鉄製の台。二本足で輪を上下のいずれかにして使う）。「金輪」と「かな（叶）は」を掛ける。

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

まつのすひつに、することもなくて、かなはといふものゝたてるをみてよめる

一三四　いかにせむいつちゆけとも世中の　かなはぬさまそにるものもなき

みやこにすみわひて、田上にまかりてよめる

一五一　あし火たく山のすみかは世中を　あくかれいつるはしめなりけり

通釈　都に住みづらくなって、田上にやって来て詠んだ（歌）

葦火を焚く山の住居は世の中から山里へとさまよい出るそのはじめであることだ。

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

Osaka Shoin Women's University Repository

宮こにすみわびて、田上にまかりてよめる

一三四　あし火たくまやのすみかはよの中を　あくかれいづるはしめなりけり

②詞花集（巻第十　雑下）

みやこにすみわびてあふみにたなかみといふところにまかりてよめる　源俊頼朝臣

三六八
三七七　あしびたくまやのすみかはよのなかをあくがれいづるかどでなりけり

③『田上集』五五と同歌である。但し詞書と四、五句が相違している。『散木奇歌集』と同様の相違がある。

むかひの江に、童のあそひたはふるゝを、尋ぬれは、みそかいといふ物ひろふなりといふをきゝてよめる

七六　江のよとにみそかいひろふうなひこか　たはふれにてもとふ人そなき

通釈　むかいの入江で、童が遊んでいるのを、尋ねて行ったところ、童が溝貝という物を拾うのであるというのを聞いて詠んだ（歌）

入江の淀んだ所で溝貝を拾う童がいるが、たとえ少しでもこっそり私の所を尋ねて来る人はいないことだ（私は童を尋ねて行ったというのに）。

語釈　○みそかい　「溝貝」。マテガイ科の二枚貝。本州以南の沿岸に分布。殻は横に長く扁平な長方形、薄くて割れやすい。長さ約三㎝。「溝貝」と「密か（みそ）」を掛ける。「溝貝と言ふ物の大きなるが口を開けて有ける」（『今昔物語集』巻二十九）。　○うなひこ　うなゐの髪形にした子供をいう。

付　①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

むかひの江に、わらはのあそひたはふるゝをたつぬれは、みそかひといふ物ひろふなりといふを聞てよめる

一三四一　江のよとにみそかいひろふうなゐこが　たはふれにてもとふ人そなき

②夫木抄（巻第三十五、雑部十七）　俊頼朝臣

一六七五〇　えのよとにみそがひひろふうなゐこがたはぶれにだにとふ人もなし

此歌は、たなかみにてむかひのえにわらはべのあそびたはぶるるをたづぬれば、みそがひひろふといふをききてよめると云々（一六七四「たはぶれ歌とてよみける中に」と

Osaka Shoin Women's University Repository

並ぶ)。

③村上忠順は「大和本草云馬刀(ミソカヒ)トブ貝ニ似テ小也泥ミゾニ生ズ海ニハナシ色黒キユエニ烏貝ト云フ本草ニモ蚌に似テ小也ト云リ其外ミゾ貝ニョクアヘリ蚌ト一類ニテ小也」と「みそ貝」について注記する。

田上に侍ける比、かたひなたにゐて、手のかさむしりてよめる

七七　あやしさはみなもとゝこそ思ひつれ　はたへはこせのうちにそ有ける

通釈　田上に居た頃、片ひなたにいて、手のかさをむしり取って詠んだ(歌)

不思議なことは、すべてがみな元通りに戻ったと思っていたのに、肌にはまだかさぶたができていたことだ。

語釈　○手のかさ　手にできたできもの。瘡。「女、手にかさ一つ二つ出でたり」(『伊勢物語』九六段)。　○みなもと　「源」(水源)と「皆元通りになる」意を掛ける。　○はたへ　「肌」と「もう一方」の意を掛ける。　○こせ　「こせがさ」のこと。皮膚病の一種で、痒疹、湿疹などをいう。

付　①散木奇歌集(巻第九　雑部上)

田上に侍りし比、かたひなたにゐて、手のかさむしりてよめる

一三七　あやしさはみなもとゝこそ思ひつれ　はたへはこせのうちにそ有ける

②『コセ』は山かげの道、または山麗の地形に名付けられる名称であるが、現在の小字『カセカイド』の『カセ』も同様の性質からくる地名であると論考した。しかし『コセ』と『カセ』は同じではなく、『カセ』は河岸魚市場の意味をあらわす『カン』と同じ意味の名称であろうと考える。……古くは小山川の川口は深く陸地に湾入していたから、そのような考えも、あながち不当なものではないと思う。(今井優、五八～五九頁)

河につりする翁のあるをたつぬれは、こさいのなけれはもとめ候なりといふをきゝて

一六八　よそ人のつくれるつみと思へとも　わかれうすると聞そかなしき

通釈　河で釣りする翁がいるので尋ねてみると、おかずがないので魚を釣っているのですと答えたのを聞いて(詠んだ歌)

Osaka Shoin Women's University Repository

他人の作る罪とは思うものの、自分のためにすると聞くのは悲しいことである。

語釈 ○ささい　御菜。おかず。　○わかれうする　「わが料する」「わが漁する」など考えられる。前者が相応しい。なお、「別れ失する」と解する説も見える（今井優、一七頁）が、従えない。

付 ①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

川につりする翁のあるをたづぬれは、ささいのなけれはもとめさふらふなりといふを聞て

一三八　よそ人のつくれるつみと思へとも　わかれうするときくそかなしき

式部大輔の、むかひの山田のかきねに、ふみはつしといふことをして、鳥をとり侍けるを、人のみぬほとにかゝりたりけるにや、けなとちりてそのゝちはかゝらさりけれは、まもらする人のおとろきて、かゝらぬよしを申けるをきゝてよめる

一三九　思ふらんしりくゝりたる鳥ならは　ふみはつしてもかゝるめ見しと

通釈 式部大輔が、むかいの山田の垣根に、ふみはずしというわなを仕掛けて、鳥を捕っていたが、人の見ていない間に鳥がかかったのであろうか、毛などがあたりに散っていてその後はもうかからなかったので、仕掛けた者（式部大輔）が不審に思って鳥のかからない旨を申したのを聞いて（詠んだ歌）

しっかりと後始末のできる鳥であるならば、たとえ一度は失敗しても二度とはふみはずしにはかかるまいと思っていることであろう。

語釈 ○ふみはつし　鳥を捕えるために作った一種のわな。歌ではわなの「ふみはつし」と失敗する意の「ふみはつし」を掛ける。　○しりくゝりたる鳥　尻をくくった鳥で、一度おかした失敗を教訓としている鳥のこと。

付 ①散木奇歌集（巻第九　雑部上）

式部大夫の、むかひのやまたのかきねにふみはつしといふ事をして、鳥をとり侍けるを、人もみぬほとにかゝりたりけるにや、けなとちりて、そのゝちはかゝらさりけれは、まもらする人のおとろきて、かゝらぬよしを申けるを聞てよめる

一三九　思ふらんしりくゝりたる鳥ならは　ふみはつしてもかゝるめみしと

田上に侍ける比、こもりかいねといふものをもちゐにしてと

Osaka Shoin Women's University Repository

りいてゝ侍けるを、又の日みそうつにして侍けるをみてよめる

㈩ ほうしこのいねとみしまにもちゐれは　みそうつまてもなりにけるかな

通釈 田上に出た頃、こもりがいねというものを餅にしてとり出したのを、翌日には味噌水にしてあるのを見て詠んだ（歌）

法師子の稲だと見ているうちに餅にして用いていると、味噌水にまでなったことだ（法師子だと思っていたら、みるまに僧都という高位にのぼったことだ）。

語釈 ○こもりかいね　語義未詳。稲の一種であろう。○みそうつ　味噌水。味噌を加えて煮た雑炊。「僧都」を掛ける。○ほうしこのいね　穂に芒（のぎ）のない稲。ぼうずいね。○もちゐ「もちいひ」（餅飯）の変化した語で、餅に同じ。「餅」に「用ゐ」を掛ける。

付 ①散木奇歌集（巻第十　雑部下　隠題）

田上に侍けるころ、こもりかいねといふものをもちゐにしてとりいてゝ侍けるを、またのひ、みそうつにして侍けるをみてよめる

一五四　ほうしこのいねとみしまにもちゐれは　みそうつまてもなりにける哉

②　源俊頼田上にて法師子の稲を詠歌の事

俊頼朝臣、秋のすゑつかたに、たなかみといふ所へまかりたりけるに、いねをかけつみたるを、「あれはなにといふいねぞ」と問ひければ、「法師子のいねなり」といひける。又あしたに「きのふの法師子のいねにてしたる御みそうづ」とて、くはせたりければ、よみ侍ける

昨日みし法師子のいね夜の程にみそうづまでに成にける哉

（『古今著聞集』巻第十八飲食）

田上に侍ける比、日のくれかたに石山のかたにかねのこゑのきこえけれは、くちすさひに

㈠a 石山のかねのこゑとそきこゆなれ
　これを連歌にきゝなして　　俊重

㈠b たかうちなしにたかくなるらん

通釈 田上に居た頃、日暮れ時に石山寺の方で鐘の音が聞えたので口をついて出るままに

a 石山寺の鐘の音が聞えて来ることだ

（と詠んだところ）これを連歌にしようとして（詠んだ付句）　俊重

Osaka Shoin Women's University Repository

b誰が磬を打ち鳴らすゆえに高く鳴るのであろう。

語釈 ○石山 石山寺をいう。瀬田川沿いにあって、如意輪観音巡礼十三番札所。開基は良弁僧正。天平勝宝六年草創の寺院。

○うちなし 「うちならし」（打鳴）に同じ。楽器の一種で、石・玉・銅・鉄などの「への字形」の板をつり下げて、打ち鳴らすもの。仏具として勤行時に使う磬（けい）の俗称。なお「うちなし」に「打ち鳴らし」と「氏なし」を掛ける（今井優、一八頁）とする説も見える。

付 ①散木奇歌集（巻第十 雑部下 連歌）

田上に侍りけるころ、日のくれかたに、いし山のかたに、かねのこゑの聞えけれ、くちすさひに（ママ）

一五五a いしやまのかねのこゑこそきこゆなれ
これを連歌にきゝなして 俊重

一五六b たかうちなしにたかくなるらん

②池田富蔵（『源俊頼の研究』五九六頁）に「石山寺の方から聞えてくる鐘にふと口吟したのを俊重は、これを連歌にききなして附けたのであろう。下句の面白さは『うちならす』ことに『磬』（うちなし＝古代の楽器）を掛けて答えたのである。夕暮れ時石山寺からひびいてくる鐘の音を亡き経信の田上荘において静かに聞いている俊頼父子の姿が浮んでくる。石山寺という背景の故か、連歌としては珍しく和歌的情景である。」との評が見える。

大納言経信

たなかみにてよみ侍ける

一五六 新古今 旅ねするあしのまろやのさむけれは つま木こりつむ舟いそくなり

㊟ 底本四五句「つま木こもつむ舟いくなり」とあるが、誤写脱字とみて『大納言経信集』（書陵部蔵本）により改める。

通釈 田上で詠んだ（歌）

旅寝する葦ぶきの小屋が冬になると寒いので、冬を越す用意に薪を伐って積んだ舟が川を急ぐのである。

語釈 ○まろや 葦や茅で葺いた仮小屋。

○つま木 折り取った焚木。 ○こりつむ「こる」樵る）は木を伐り出すことで、伐り出した木を舟に積むことをいう。

付 ①大納言経信集（書陵部蔵本）

田上の路にて

一五五 たひねするあしのまろやのさむけれは つまきこりつむふねいそくめり

Osaka Shoin Women's University Repository

②新古今集（巻第十　羇旅歌）

たなかみにてよみ侍りける　　大納言経信

九二七　たびねするあしのまろやのさむければつまぎこりつむ舟いそぐなり